

第 71 回全国高等学校演劇大会(香川大会)  
第 49 回全国高等学校総合文化祭演劇部門  
生徒講評委員長  
香川県立観音寺第一高等学校  
渡邊 凜音

## 全体講評

今大会では「自分とは何か」や、「当たり前や普通とは何か」ということを考えさせられる作品が多かったと感じています。私たちはお互いに違う価値観を持っています。それを認め、共有し、理解し合うことの大切さを各上演から学ばせてもらいました。何が正解か分からぬこの世の中で、私たちがどのように考え、どのように行動していかなければいけないのかを深く考える機会になりました。それでは、各上演について講評させていただきます。

### 上演 1 市川学園市川高等学校「ばれ★ぎやる」

バレーとギャルという一見奇妙な組み合わせは、「自分らしい強さ」を突き詰めるという点で繋がりました。そこから「自分らしい強さ」を探して、思い悩む主人公が成長していく姿に共感し、自分らしくバレーに打ち込む姿に青春での情熱を感じました。

### 上演 2 鹿児島県立伊集院高等学校「朝は明けたり」

奄美大島に対する郷土愛や大きな存在に立ち向かう勇気、諦めずに進み、想いを最後まで主張することの大切さを実感しました。当時は日本に帰ることが簡単ではなかったことを知り、語り継いで発信していくことによって戦争を風化させてはならないという思いを強くした作品でした。

### 上演 3 高田高等学校 「第 76 回中部日本高等学校演劇大会 文部科学大臣賞受賞作品」

唯一無二の親友を失った現実を受け入れられないミサキに寄り添う部員たちの懸命な姿に、自分の思いを伝えることの大切さ、人と過ごす時間のかけがえの無さを改めて考えさせられました。地震はいつ起こるかわからないし、日常が突然奪われるという恐怖を突きつけられ胸が締め付けられる思いがしました。

### 上演 4 神戸常盤女子高等学校「キャベツはどうした?」

進学や就職で悩む高校生の私たちに寄り添ってくれる作品でした。親からの意見に振り回される中、自分の未来を自分で決める大切さに気がついたトモエから自分の未来に責任を持つことを改めて学びました。また、「自分の当たり前」を疑い、人に自分の当たり前を押し付けないようにこれから過ごしていこうと思いました。

### 上演 5 千葉県立松戸高等学校「わたし」

ゴリラが人間になるという異色の作品でした。全体的にコミカルでありながらも、戦争の残酷を感じさせられた劇でした。不登校だったことはがワタシを通じて成長していく様子に心打たれ、またワタシの過去に胸を締め付けられました。この劇からは真っ直ぐに思いを伝える大切さを学ぶことができました。

## 上演 6 北海道網走南ヶ丘高等学校「はしれ、たくしい！」

迷い、葛藤しながらも自分の選んだ道を進んで成長していく登場人物たちの姿に勇気を貰いました。たとえ夢を諦めてしまっても、一生懸命取り組めば幸せを掴むことが出来るということや、人生に間違いはないということを教えてくれる作品でした。

## 上演 7 北海道苫小牧東高等学校「やっぱり、こっちがいい」

この作品では、私たち高校生の日常で良く見られる光景が等身大でリアルに刺さった作品でした。また、男女の細かい心理描写も巧みに描かれていて、とても共感できる部分が多かったです。事実と真実は違うというテーマもこの作品にはあったように思います。

## 上演 8 徳島県立城東高等学校「ポーチとピロティ、ストックヤード」

現実と非現実が交差する中、何事にも終わりがあることに純粋に寂しくなりました。それと同時に私たちが手放したものたちはどこへ行ってしまったのか、またこれから手放すものは消えてしまうのか。自分の何かを手放すという行為が無責任であることに気付かされ、終始圧倒されました。

## 上演 9 青森県立青森中央高等学校「あの子と空を見上げる」

この作品全体を通して問い合わせられていたのは、「正義とはなにか」というテーマでした。残酷で、救いようのない現実を描きながら、それでも「この現実を私達は見続けなければならない」と思わせる、強く誠実な作品でした。

## 上演 10 島根県立松江工業高等学校「お手紙かみかみ」

この作品では、答えの出ない問い合わせについて話し合っていくのですが、その答えはいくら議論を尽くしても答えを出すことはできません。そして、最終的に「終わらせること」によって有限の中に無限を見出していました。政治、戦争、直接的には描かれていないても様々な社会問題が想起されるような不思議な余韻を残す作品でした。

## 上演 11 香川県立善通寺第一高等学校「A Happy Christmas」

それぞれの事情を抱えた部員たちが劇中劇や稽古を通して、普通とは何かという疑問を私たちに訴えてくるとてもリアルな作品でした。またこの作品で生まれたすれ違いはクリスマス付近で起こったからこそ解決したのだと思い、もしクリスマスでなければどうなっていたのだろうと想像が膨らみました。当たり前を無意識のうちに押し付けてしまう危険性について考えさせられる劇でした。

## 上演 12 長野県立松本美須ヶ丘高等学校「愛を語らない」

全体を通して愛とは何かというテーマで物語が進んでいき、まるで小説を読んでいるかのような気持ちになりました。鉄山にとって娘の亜伊は本当に大切なものであったからこそ、作品の題材にはせず、亜伊については語らないという不器用な親子愛が描かれており、独創的な舞台装置や演出方法にも強く心を惹きつけられる作品でした。